アスンシオン日本人学校における礼儀・スピーチ指導や現地校との交流

前アスンシオン日本人学校　教諭
宮崎県宮崎市立宮崎西小学校　教諭　江内谷　義　郎

キーワード：日本文化の理解，礼儀指導，国際理解教育

１．はじめに

南米大陸の中央に位置するパラグアイ共和国。明るい空と豊かな緑に包まれ，人も気候もあたたかく，時間がゆっくりと流れる国である。このパラグアイの首都にあるアスンシオン日本人学校に３年間勤務し，試行錯誤を繰り返しながら，充実した日々を送ることができた。

このアスンシオン日本人学校には小学部と中学部が併設され，在籍する児童生徒は約20名。海外で生活している以上，街に出れば外国人ばかりであり，テレビや本も外国語ばかりである。当然のことながら，日常生活においては日本語や日本文化にふれる機会は少ない。そのような環境だからこそ，日本人学校での教育がとても重要と考え，職員一丸となって指導にあたった。

アスンシオン日本人学校のモットーは「あいさつが元気，笑顔が元気，心が元気」。まずは，あいさつ指導や人前でも堂々と話せる力（スピーチの能力）の育成に力を入れた。また，現地校との交流も積極的に行ってきた。書写の学習をしたり，日本の遊びを紹介したりして，日本の文化に親しませることができた。さらに，音楽科や外国語活動，総合的な学習の時間では，パラグアイの音楽や言語に親しむ学習を多く取り入れ，他国文化の理解やそのよさに気付かせる活動を多く取り入れた。このような活動を通して，日本（日本文化）のよさはもちろんのこと，パラグアイのよさにも気づく子どもたちの姿を見ることができた。

海外に住んでいるというからこそ「日本（和）の心」を意識した教育実践，海外だからこそできる「現地との交流」を取り入れた実践を紹介する。

２．実践の概要

(1) 型を教えるあいさつ指導・家庭との連携を図るスピーチ指導

「今日１日，よろしくお願いします。おはようございます」。元気のよい，大きな声が朝の校舎に響き渡る。スクールバスで全校一斉に登校し，決まった場所に立ち，決まったあいさつで毎日が気持ちよくスタートする。これは下校時も同じである。このあいさつはメンバーが変わっても受け継がれ，現在も続いている。朝と帰りだけでなく，例えば職員室への入り方など，あいさつの仕方（型）をしっかりと指導し，徹底を図ってきた。高学年が下の学年に模範を示したり，転入生に教えたりといった姿が見られている。

また，毎週月曜日の全校朝会では，輪番で全校スピーチを取り入れ，児童生徒や教職員がみんなの前で話す機会をつくっている。スピーチの原稿は必ず暗記する。写真や具体物を示して興味を引き付けるなどの工夫も見られる。聞く側は質問や感想を発表する。スピーチの講評を毎回教職員が行う。さらに，スピーチの様子はビデオに録画し，保護者に視聴してもらっている。子どもたちは学校だけでなく，家庭でも称賛されることになる。

(2) 現地校との交流

９月に友情週間（セマナ・デ・ラ・アミスタ）という行事がある。これは，本校と現地の学校（カンポ・ベルデ校）とで互いの学校に訪問し，学習や休み時間を共に過ごして交流を深めるというものである。日本人学校では日

本文化や日本の伝統的な遊びを取り入れている。日本文化の交流として毎年行っているのは書写（書道）である。「平和」「友」などの手本を日本人学校の児童生徒が書き，その意味も含めてスペイン語で説明する。パラグアイの子どもたちに毛筆を体験させ，筆の使い方も手に手を取りながら教える。日本の遊びでは，こまやあやとり，折り紙などにふれさせ，パラグアイの子どもたちにとても喜ばれている。

現地校と書写で交流

また，5 月の運動会では複数の学校を招待し，競技やゲームを楽しんでいる。他にも，近隣の学校に行き，体育の授業に参加したりなどの交流を取り入れている。

(3) 現地文化を理解する学習指導

音楽科では，公用語であるスペイン語や現地語であるのグアラニー語の曲を題材として扱い，指導に取り入れている。パラグアイ独特の明るい曲調やリズムを味わい，言葉や歌詞の意味などをおさえながら歌っている。また，パラグアイを代表する楽器「アルパ」のコンサートを開催したり，アルパの伴奏で実際に歌うという活動も取り入れた。さらに，現地を代表するダンス「ダンサ・パラグアージャ」も取り入れ，パラグアイ人の指導者の教えを受け，学習発表会などで発表した。総合的な学習では現地理解をテーマとし，パラグアイの文化やスポーツ，歴史などを調べ，実際に見学したり，インタビューをしたりして理解を深めた。調査のまとめとして，児童生徒や保護者の前で研究発表という形で成果を報告した。

3．成果と今後の課題

(1) あいさつ指導・スピーチ指導

まずはあいさつの仕方（型）を身に付けようということで始まったこの指導。型が決まっていることで自信をもって大きな声であいさつすることができた。毎朝，全教職員も一列に並び，子どもたちに負けないくらいの大きな声であいさつし，ハイタッチで迎えるので，朝のスタートがいつも気持ちよく始められる。このことは子どもたちに元気にあいさつすることの心地よさ，大切さを認識させることにつながった。その上，他の様々な場面においても，積極的に，明るい声でのあいさつや受け答えが見られるようになった。

全校スピーチについては，回を追うごとに見応えのあるものになっていった。高学年からの輪番で行うので，下の学年への模範になった。聞く側も感想を発表するので集中して聞いていた。家庭でも称賛されるので，スピーチを通して大きく成長した子どもたちであった。

(2) 現地校との交流

交流はすべてスペイン語で行う。教育課程にも取り入れているスペイン語の学習を生かし，子どもたちが辞書を片手に司会原稿や会話のマニュアルを作成した。交流の時に，パラグアイの子どもたちから予期せぬ質問をされることがあっても，日本人学校の子どもたちはあわてることなく，落ち着いて対応することができた。パラグアイの子どもたちが，書写の学習や日本の遊びに深く興味を示し，とても楽しんでくれたことで，日本文化のよさに改めて気づいていた姿が見られた。

(3) 現地文化を理解する学習指導

スペイン語やグアラニー語の歌を覚えることで現地の文化にふれることができ，曲の雰囲気やリズムが日本のものとは違う点があることを感じていた。現地のダンスについても同様で，難しい動きにも慣れ，堂々と踊っている子どもたちであった。日本の歌やダンスなど，全般的に落ち着いた雰囲気に対し，パラグアイのものは明るくにぎやかである。「どっちもいいところがあるなあ」という声が聞かれ，それぞれのよさを味わうことができた。総合的な学習でパラグアイのことについて調べ，実際に見学やインタビューをしてまとめたことで，机上の学習ではなく，実りある学習となった。研究発表では堂々と成果を報告していた。

一丸となって取り組んだ教職員

日本の特徴を表す言葉として「和」がしばしば用いられる。あいさつ指導，スピーチ指導，文化の交流，それらのどの実践にも，「和」の精神が背景に込められていると思っている。日本人としての自分に自信をもち，積極的に他と関わろうとする子どもたちの姿があった。アスンシオン日本人学校に在籍した3年間，教職員，児童生徒，家庭との「和」を大切にして，一丸となって指導にあたったことにより，このような大きな成果を得ることができた。私にとってとても貴重な三年間となった。帰国してからも，この「和」の心を常に意識して教育の現場に向かっている。